

3. 学習者はオノマトペを適切な場面に結び付けることができるのか —Web 動画プログラムによる評定実験を用いて—

中石ゆうこ（広島大学大学院）

3-1. 問題の設定

第三の発表では、音と意味とが有縁的に結びついている日本語のオノマトペのような語を学習者がどのように理解可能なのかについて議論する。オノマトペはもっとも一般的な定義では、現実の音や動作、精神的、身体的様態を真似ている語である（田守・スコウラップ, 1999:10）。オノマトペは上記2つの発表で取り扱った動詞等と異なり、外界の音や様態を音で表すという音象徴的特徴を持っている。

恣意的な性質を持つ通常の語に比べて、オノマトペは音象徴的特徴というもう一つの手がかりが加わり、それによって習得が容易になるのではないかと予想される。しかし、オノマトペの意味を過不足なく説明するのは難しく（有賀, 2007）、日本語のオノマトペは、L2 学習者によって習得が難しいことが指摘される（Hamano, 1986, 金, 1989, 彭, 2007）。このように、第一言語獲得（習得）における「なじみ深さ」と L2 習得における「難しさ」という正反対の性質は、どこから生じるのか。

3-2. 先行研究

オノマトペをめぐる一番の謎とは、日本語母語話者、特に大人にとってはそれを使ったときに、非常に「ぴったりくる」、「しっくりくる」感じがするのに対し、L2 学習者には最後までその感覚が理解しがたく感じられるということである（今井・針生, 2007:151）。日本語のオノマトペの習得については、これまでにあまり多くは実証的研究がなされていない（Iwasaki, Vinson & Vigliocco, 2007）。中石・佐治・今井・酒井（2011）では、上級学習者（中国語母語）の産出課題での正答率は低く、オノマトペの習得は難しいものであることが裏付けられた。

3-3. 実験

3-3-1. 目的

学習者にとってオノマトペが難しいというのは、何に起因するのであろうか。オノマトペ学習の難しさが、オノマトペが持つ音象徴的特徴による側面と他の語彙同様の学習の困難さという側面を併せ持つと考えるならば、NS と学習者との間にはオノマトペの意味を判断する基準に違いがあると考えられる。そこで本研究では、Web 動画プログラムによるアニメーション評定課題（中石他, 2011 と同じ材料）を用いて、オノマトペ語彙と使用文脈の結びつけについて学習者の判断がどのようなものであり、それがどの程度日本語母語話者（以下、NS と表記）と共通するかを探る。

3-3-2. 対象

調査協力者は、英語圏の高等教育機関で日本語を学ぶ学習者 23 名（SPOT ver.A の平均 33.5 点（ $SD=17.6$ ））、学習歴平均 5 年 2 か月（最長 12 年、最短 2 年）、滞日歴平均 4 か月（最長 1 年 5 か月、最短 0 か月）、比較群として NS 17 名であった。

3-3-3. 方法

Web 動画プログラム²によるアニメーション評定課題を用いた。材料は 18 項目³であった。項目ごとに作成したそれぞれのアニメーションに対して、以下の 5 つの条件に沿った刺激語を一行に提示して、それぞれの語を 11 段階（5 match~ 0 neutral ~ -5 unmatched）で評定してもらい、学習者と NS の評定との違いをみた。

5 つの条件の刺激語

1. 基準語 (D1): NS による産出実験で多く産出されたもの (例: しくしく)
2. 新奇語 (D2): 基準語の母音だけを変化させ、音象徴を残しつつ音を変えたもの (例: しきしき)
3. 類義語 (D3): 基準語と意味が類似しているが、音が違う (ABAB の A が違う) もの (例: めそめそ)
4. 類音語 (D4): 基準語と音が類似している (ABAB の A が同じ) が、意味が違うもの (例: しとしと)
5. 既知語 (D5): 既存の動詞や形容詞、副詞を繰り返して作成した造語 (例: かなかな)


Clip3	しくしく	しとしと	めそめそ	しきしき	かなかな
	5 (match)	5 (match)	5 (match)	5 (match)	5 (match)
	4	4	4	4	4
	3	3	3	3	3
	2	2	2	2	2
	1	1	1	1	1
	0 (neutral)	0 (neutral)	0 (neutral)	0 (neutral)	0 (neutral)
	-1	-1	-1	-1	-1
	-2	-2	-2	-2	-2
	-3	-3	-3	-3	-3
	-4	-4	-4	-4	-4
	-5small(unmatch)	-5(unmatch)	-5 (unmatch)	-5 (unmatch)	-5 (unmatch)

図 3-1. アニメーション評定課題の画面 (一部)

実験は静かな室内で個別に行った。教示に用いた言語は、学習者には英語、NS には日本語である。オノマトペ語彙は平仮名で呈示された。所要時間は 30 分程度であった。

3-3-4. 結果

3-3-4-1. 平均受容率の比較

刺激語別の平均値を見ると、NS は受容傾向にあるのが D1 ($M=4.8$) , D3 ($M=2.7$) , 受容しない傾向があるのが D2 ($M=-1.8$) , D4 ($M=-3.3$) , D5 ($M=-1.8$) であった。基準語[D1]に関してはほとんど満点に近く評定されていたが、基準語と音が類似している新奇語[D2]、類音語[D4]の評定は低かった。一方学習者の場合は、刺激語別の平均値を見ると受容傾向にあるのが D1 ($M=2.0$) , D2 ($M=-.35$) , D3 ($M=.66$) , 受容しない傾向があるのが D4 ($M=-0.49$) , D5 ($M=-0.25$) であり、NS に近い傾向であるが、ばらつきは大きかった ($SD=3.51$) 。

3-3-4-2. 学習者と NS の受容パターンの比較

参加者の各項目に対する受容パターンを詳細にみるために、NS、学習者それぞれの参加者群がアニメーションに対して行っ

表 3-1. 抽出された因子

参加者	評定項目	次元 1	次元 2
NS	ターゲット	-0.01	-0.362
	新奇	0.631	0.775
	類義	0.999	0.013
	類音	0.633	0.635
	既存	0.689	0.5
学習者	ターゲット語	0.137	0.99
	新奇語	0.618	0.407
	類義語	0.1	0.526
	類音語	0.994	0.101
	既存語	0.728	0.087

² ランダムに並べた実験システムを 4 セット作り、参加者を 4 セットに均等

ては http://web.sfc.keio.ac.jp/~nons/onomatopea_experiment/mimetic_rating_Haw

³ 3 つのオノマトペのタイプ (擬音語、擬態語、擬情語) がそれぞれ 6 項目

た D1-D5 の各評定項目の平均値を入力とし因子分析⁴を行った。表 3-1 に結果と抽出された因子を示す。NS から抽出された第一因子を見ると、「ターゲット」の項目以外に正方向に重み付けがされており、この因子を「非ターゲット語に対する因子」と名付けることができる⁵。一方、学習者の第一因子を見ると、「新奇語」・「類音語」に重み付けがなされており、これらの二つの項目は「音の類似性に関する因子」と名付けることができる。これは学習者が NS と比べて、音をオノマトペの意味の判断基準として用い易いことを示していると考えられる。

更に各学習者に与えられた第一因子得点と、学習者の SPOT 得点との相関を見ると、有意な負の相関 ($r = -.55$) があった。このことは、音をオノマトペの意味の判断基準として使う傾向は、日本語に対する学習が進む過程で軽減されることを示している。

3-3-5. 考察

本研究を通して、以下の3点が明らかになった。

- (1) 日本語母語話者は基準語 (例：しくしく) を高く受容するが、それ以外の語は類義語 (例：めめめ) であっても、すべて低く受容する傾向がある。
- (2) 学習者の理解は、日本語母語話者では非受容であった新奇語 (例：しきしき) を受容する傾向である点で日本語母語話者と異なっている。
- (3) 音を手がかりにする学習者の判断は、日本語レベルが高くなると少なくなる。

以上のことから、NS は、ある動画に対して「これだ」と一つ最適な語彙 (オノマトペ) を決めたら、それ以外の受容を下げることが分かった。この結果は、NS がオノマトペを音の感じ (音象徴) ではなく、語彙として運用していることの表れであろう。一方、学習者の理解では新奇語 (例：しきしき) が受容傾向であった。これは、学習者は音の感じで、語と場面との適切さを判断している、つまり音象徴的な判断をしていると言えるのではないだろうか。日本語レベルとの関係からは、学習者には音象徴的な判断をするステージがまずあって、日本語の上達に伴い、音の類似だけでなく、学習によってある語を語彙のネットワークの中に組み込んでいくステージがあることが示唆された⁶。この過程が明らかになれば、ある時期における音象徴が言語習得において果たす役割を指摘することができる。教材開発の点でも、音象徴性が母語を超えた普遍的なものから、個別的なものへ向かって進んでいく学習過程モデルに基づいて、指導順序を考えることが有効になるだろう。

⁴ 因子抽出には最尤法を用い、二次元解を採用した。累積寄与率はそれぞれ、86% (NS) , 67% (学習者) であった。

⁵ この因子は、NS の参加者がターゲット語に対して高い評定を与えない場合に、類義語を中心としたほかの項目他の項目に評定が流れることを意味している。これは逆にターゲット語に対する評定はそれらとは独立に行われることを示しており、前節の D1 に対する集中した評定を裏付けている。

⁶ 新奇語 (例：しきしき) が受容傾向であることに対するもう1つの解釈として、呈示した語のうち、なじみのない語については、どの語が適切な形態であったのか混乱し、その結果、似た音の語は、どの語も高く評定したとも考えられる。この可能性については、日本語学習者ではない英語話者などに今回と同じ実験を実施することで、今後明らかにしたい。

引用文献

- 有賀千佳子(2007)「オノマトペを通して、語彙の学習・教育について考える」, 『日本語学』26(7), 明治書院, pp.65-73.
- 今井むつみ・針生悦子(2007)『レキシコンの構築：子どもはどのように語と概念を学んでいくのか』岩波書店.
- 金慕箴(1989)「中国における日本語の擬音語・擬態語教育について」, 『日本語教育』68, 日本語教育学会, pp.83-98.
- 田守育啓・ローレンス・スコウラップ(1999)『オノマトペー形態と意味』, くろしお出版.
- 中石ゆうこ・佐治伸郎・今井むつみ・酒井弘(2011)「中国語を母語とする学習者は日本語のオノマトペをどの程度使用できるのかーアニメーションを用いた産出実験を中心としてー」『中国語話者のための日本語教育研究』第2号, pp. 42-58.
- 彭飛(2007)「ノンネイティブから見た日本語のオノマトペの特徴」, 『日本語学』26(7), 明治書院, pp.48-56.
- Iwasaki, N., Vinson, D., & Vigliocco, G. (2007) “What do English Speakers Know about *gera-gera* and *yota-yota*?: A Cross-linguistic Investigation of Mimetic Words for Laughing and Walking”, 『世界の日本語教育』17, 国際交流基金, pp.53-78.